

# 全校で統一した指導による確かな学力の向上をめざす取組 ～指導事項を明確にした授業づくりの工夫を通して～

千歳市立千歳小学校 学級数 10 (校長 今村 敏之)

## I 実践テーマの趣旨

本校では、「千歳小TRY」を合言葉に全校で統一した指導に取り組み、全ての教育活動の基礎となる「学びの土台」づくりの充実を図っている。また、「自分の思いや考えをもち、表現できる子の育成～資質・能力を育成する学びの過程の工夫を通して～」を研究主題に掲げ、あらゆる言語活動の素地となる国語科の授業を通して、研究を進めてきた。

## II 実践の概要

### (1) 「千歳小TRY」

学力向上の取組である「千歳小TRY」では、大きく4つの観点で指導に取り組んでいる。その1つとして、「指導法の工夫」では、以下のねらいに基づき、効果的な指導の充実を図っている。

- ・誰が学級担任になっても、児童が混乱なく安心して学習できる。
- ・年度当初から、教師が教科指導に集中できる。
- ・保護者が学習指導に関して、学年や学級の差異を感じず、全ての学級担任の指導に対して信頼を得ることができる。



また、指導の統一を図るための重要な手立てとして、年度当初に研究部と教務部が連携して研修を行い、以下の点について共通理解を図っている。

- ・学習指導の統一事項・・・ノート指導、計算の補助数字の書き方、数直線の活用等
- ・習熟度別に応じた指導方法の改善・・・習熟の時間の確保、リズムやテンポのよい授業の実施等
- ・学習支援員との連携・・・学級担任・担任外との情報の共有、効果的な支援体制の構築等

### (2) 国語科における「学びのプラン」と「6年間の系統表」の作成と活用

#### ① 「学びのプラン」の作成と活用

「学びのプラン」は、育成を目指す資質・能力と学習内容を單元ごとにまとめたものであり、全学年の文学的な文章を扱う全単元で作成し、活用している。これには以下の利点がある。

- ・単元や各単位時間の導入で、「学びのプラン」を確認することにより、児童自身が身に付ける力を具体的に理解し、見通しをもって、主体的に学習することができる。
- ・単元で育成する資質・能力が明確になり、教師はより計画的に指導することができる。
- ・学習したことを振り返る際に、何が身に付いたのかが児童も教師も捉えやすい。

月日	みんなにつけてほしい力	学習の内容
第一次 1	①学習の流れを知り、見通しをもつ力 ②「読みのヒント」をもとに、文章の中身をつかむ力。	・「学びのプラン」をもとに、この単元の学習内容を知る。 ・「読みのヒント」をもとに、文章の内容を知る。
第二次 2	③一つの視点から、登場人物の人物像を読み取る力。	・二つの視点から、登場人物の人物像を読み取る。
第二次 3	④全話文や心内語、情景描写をもとに心情を読み取る。	・登場人物の心情の変化について交流する。 ・この後のことを想像して交流する。

#### ② 「6年間の系統表」の作成と活用

文学的な文章に重点を置いた年間指導計画を作成し、「6年間の系統表」としてまとめている。これにより、各単元で育成を目指す資質・能力が明確になり、6年間の言語活動のつながりを視覚的に捉えることができ、当該単元の言語活動を通して、より効果的に指導することができる。

## III 成果と課題

- 学習指導の統一事項等について共通理解を図ることにより、各学級担任の授業力が高まり、誰が学級担任であっても安心して指導することができた。
- 「学びのプラン」と「6年間の系統表」を基に授業計画を作成することにより、各単元における「育成を目指す資質・能力」を一層意識して指導することができた。
- 今年度は、文学的な文章に重点を置いた取組を行っているため、今後は、説明的な文章や他教科の指導に取組の成果を広げる必要がある。

# 村全体で統一した学力向上の取組

泊村立泊小学校 学級数 7 (校長 山本 康博)

## I 実践の趣旨

本校では、児童の学習内容の定着に課題が見られることから、小・中学校が連携・協力し、村を挙げて確かな学力を身に付けさせる取組を推進するため、令和2年度から、「泊村学力向上推進会議」を立ち上げた。

本会議では、令和2年度の取組の重点を「分かる授業の充実」とし、「授業展開の統一」及び「小中乗り入れ授業」などを通して、「授業改善」に取り組むこととした。

## II 実践の概要

### 1 授業展開の統一の取組

泊村では、知識を習得するだけにとどまるのではなく、思考力・判断力・表現力等を育成することができるよう、「課題→自力解決→交流→まとめ→振り返り」という学習過程をカードで示し、児童が見通しをもって学習することができるようにしている。

また、高学年では、児童の「振り返り」を教室に掲示するなど、見える化して共有し、「振り返り」の充実を図っている。

### 2 小中乗り入れ授業の取組

週1回の国語と算数(5・6年生対象)の乗り入れ授業を行っている。児童が、中学校教員の専門性を生かした指導を受けることで、中学校の学習への期待感を抱くことにつながっている。

また、中学校教諭がT1を受けもつことで、学級担任が個々の児童の理解度やつまずきにすぐに気付くことができ、個別指導の充実につながっている。

さらに、乗り入れ授業の参観及び研修を小中合同で行い、統一した授業展開や、学習内容の系統性を踏まえた指導について研鑽を深めることができている。

## III 実践の成果(○)と課題(●)

- 村全体で取組を推進することにより、小・中学校で統一された授業展開が定着してきている。
- 1時間の学習の流れを分かりやすく示したことにより、児童が安心して授業にのぞむことができている。
- 小中合同で授業参観や研修を行ったことにより、系統性を意識した指導の充実が図られている。
- 小学校教員による中学校への乗り入れ授業についても、実施していく必要がある。
- 授業交流の時間確保のため、ZOOM等を活用した授業参観等をさらに進める必要がある。
- 児童一人一人の望ましい生活習慣・学習習慣の確立に向けて、家庭の良い取組事例を収集し、村のコミュニティ・スクール便りで地域全戸に紹介するなどして、広めていく必要がある。

「あ～、そうか！」中学校の先生のアドバイスでひらめいた。(6年生)

**泊村の学力向上の取組** (小・中・高・令和2年度～)

**目標**  
子どもたちの未来のため、村をあげて、児童生徒の学力向上に取り組む。  
(全国学力・学習状況調査結果で、全国平均以上を目指す)

**令和2年度の取組**

1 授業展開の統一	2 小中乗り入れ授業	3 小学校における統一した指導の充実
①課題解決型を重視し、「課題→自力→交流→まとめ→振り返り」で統一 ②「振り返り」まで行うよう努める ③子どもの良い「振り返り」を全員で共有	①子どもがつまずきやすい学習の指導を小中の先生同士で研究 ②研究した指導のポイントを1枚資料にまとめ、村の教員全員で共有 ③4月から1回、国語と数学は授業参観及びT2で乗り入れする。算数については隔週(2学期は毎週)2時間でT1及びT2の乗り入れや単元指導を実施し円滑な進学につなげる	①加配教員が全学級の算数において、T1による個に応じた指導を行う(週20時間程度) ②乗り入れ授業に伴い、空き時間のできた小学校教員による他学年の習熟度別指導の実施 ③一人一人の理解の程度に応じた放課後学習の充実

**評価検証**  
①全国学力・学習状況調査やチャレンジテスト、CRTにより、全道や全国との比較、單元テストによる継続的な把握など、定期的に検証する  
②「国語の授業がよく分かる」「算数・数学の授業がよく分かる」について、6月、10月、12月、2月にアンケートをとり、70%以上の回答を目指す

**「分かる授業」を支える取組**

4. 家で学習する時間1時間以上を目指す取組  
①チャレンジテストの活用、家庭学習ノートの書き方の徹底(課題と振り返り)。  
②生活リズムチェックシート等の継続的な活用と徹底(強化合月の取組)。

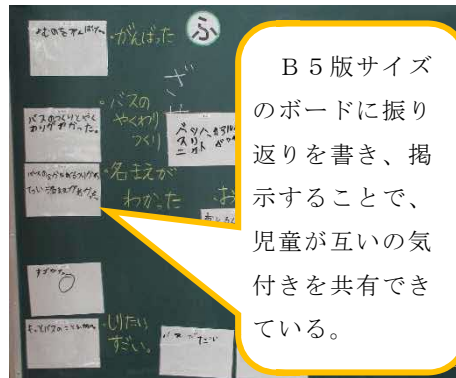
**評価検証**  
①家で1時間以上勉強している」について、6月、10月、12月、2月にアンケートをとり、70%以上の回答を目指す

5. CS導入による学校、家庭、地域との連携の確立  
①学習習慣、生活習慣の確立に関する保護者へ意識啓発の検討と実施

6. 授業教諭を中心とした教育の充実  
①教育推進委員会を設置し、望ましい学習習慣の確立に向けた児童生徒への指導や保護者への意識啓発

7. 「分かる授業」に向けた教員研修の充実  
①指導主事等を招いた合同研修会の実施  
②相互の公開授業の実施

「泊村の学力向上の取組」全体構造図



B5版サイズのボードに振り返りを書き、掲示することで、児童が互いの気付きを共有できている。

児童の振り返りの掲示

学級担任・T T・中学校教諭の3名でしっかりと個を見取る授業を行っている。



乗り入れ授業の様子(6年)



# 確かな学力の定着に向けたS-P表の活用による授業改善

和寒町立和寒中学校 学級数3(1) (校長 中間 靖之)

## I 実践テーマの趣旨

本校は、令和元年度全国学力・学習状況調査の数学で、全国平均を26.8ポイント下回った。数学の学力向上に向けた取組として、今年度、定期テストやチャレンジテストの結果を「S-P表」を活用して分析し、生徒個々の定着状況をきめ細かに把握した上で、重点的に指導すべき内容を焦点化し、授業改善を進めることとした。

## II 実践の概要

### 1 粘り強く問題に取り組む態度の育成に向けた取組

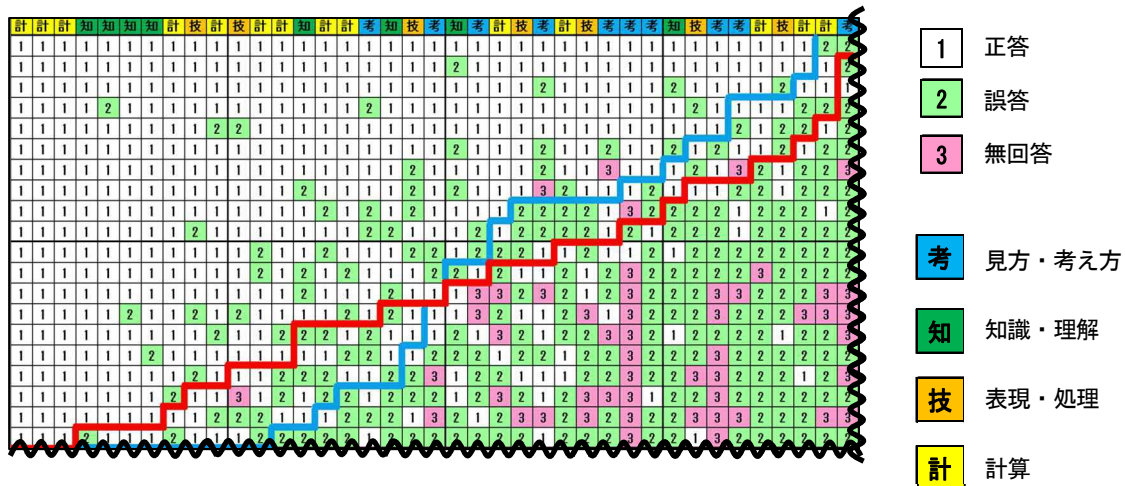
1学期の期末テストをS-P表を活用し分析したところ、無回答が多かったことから、最後まで問題の解決を図ろうとする態度を育成することに重点を置き、次の2点について授業改善を図った。

- ①問題解決の前に、個々の生徒に確実に見通しをもたせることにより、「自己の課題」であるという意識を強くもたせる。
- ②時間配分を工夫することにより、生徒の自己解決のための十分な時間を確保する。

### 2 基礎・基本の定着に向けた取組

1学期の期末テストをS-P表を活用し、「数学的な見方・考え方」、「数学的な表現・処理」、「数量についての知識・理解」、「計算」の4観点で分析したところ、「数学的な見方・考え方」以外の3観点の正答率が低く、基礎的な概念や原理・法則などの理解、数学的に表現・処理する技能の定着に課題が見られたことから、基礎・基本の定着に重点を置き、次の2点について授業改善を図った。

- ①授業の導入において、テレビ画面に「知識・理解」に関する問題をフラッシュカードのように出題し、多くの問題を反復して解く機会を設定する。
- ②基礎的な計算問題のプリントを生徒に配付し、多くの計算問題に取り組ませる。



【第3学年1学期の期末テスト数学科におけるS-P表（一部抜粋）】

## III 実践の成果 (○) と課題 (●)

- 定期的にS-P表を活用した分析をすることにより、日常の授業における指導の成果や改善点を見出すことができ、授業改善につなげることができた。
- 「ほっかいどうチャレンジテスト1学期末問題」では、無回答が明らかに減少するとともに、基礎的な計算問題における誤答が減少し、成果が見られた。
- 「ほっかいどうチャレンジテスト」の結果を、全道平均と比較し、S-P表を活用した分析を行うことにより、本校の生徒の課題を把握することができ、授業改善につなげることができた。
- S-P表を活用した分析による授業改善に成果を感じる教員が増えてきていることから、今後は、他教科にも取組を拡大し、学力向上に向けた取組の一層の充実を図る必要がある。

# 国語専科を中心とした「語彙力UPプロジェクト」の実践

増毛町立増毛小学校 学級数10 (校長 矢藤 典彦)

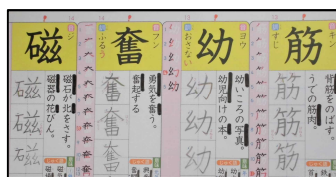
## I はじめに

本校児童の国語科の学力については、全国学力・学習状況調査において、ここ数年間、全国平均に満たない状況にある。特に記述式の問題においては、正答率が低い傾向にあり、授業中に自分の意見を述べる場面でも、語彙力の不足から最後まで説明ができない児童が多かった。そこで、今年度より配置された国語専科を中心とした「語彙力UPプロジェクト」を立ち上げ、全ての子どもたちに、他教科においても必要な語彙力や文章力を高めようと考えた。現在3年生以上の国語の授業は専科教員が担当しており、本校児童に必要な国語の力を高めるため、日常からより専門的・系統的な指導となるよう工夫・改善を図っている。また、高学年担任の業務の軽減という意味で、本校の働き方改革の一助となっている。

## II 実践の概要

### 1 語彙力を高める漢字指導

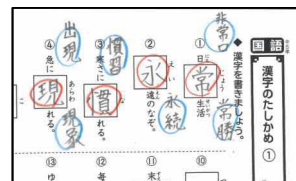
国語の学習の導入の5分間は、常に漢字指導を行っている。「読み」の学習では、ドリルの新出漢字の音読み・訓読み・例文のふりがなをマジックで消し(写真1)、何度もくり返し読む練習を行う。「書く」指導では、一人一人が専科教員の前で空書きを行い(写真2)正しい書き順が確実に身に付いているかどうかを確認している。子どもたちは、それぞれ自分のペースで学習を進め、次の活動に見通しがもてることから、主体的に学習に取り組む様子が見られている。また、学期末のまとめの50問テストでは、「ボーナスポイント制」として、知っている熟語を書く活動を取り入れている(写真3)。この活動により、文字を単体としてだけではなく、熟語として言葉に転用できる力を養い、語彙力の向上を図っている。



【写真1】



【写真2】



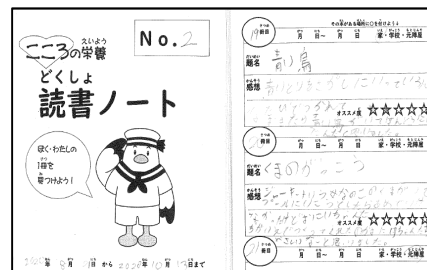
【写真3】

### 2 「読む力」「書く力」を高める実践

「読む力」と「書く力」を関連付けて、子どもたちが「読み取ったことについて、自分の考えをもち、表現する」ことができるよう授業改善を図っている。具体的には、意見文の学習において、説得力のある主張をするため、教科書の文章から根拠を見つけて引用し、根拠をもとにして理由を考え、意見文を書くことができるようにした。子どもたちが、言語の見方・考え方を働かせて、「何のために、何を読み取り、そして読み取ったことをどのように生かすのかということ」を具体的に考えることができるよう指導を行っている。

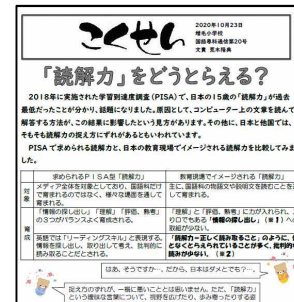
### 3 読書活動の日常的な推進

学校全体で子どもたちが読書に親しむことができるよう、読み聞かせ等を行っている。しかし、全国学力・学習状況調査の児童質問紙や児童アンケートの結果からは、読書量は少ない結果が得られたことから、「読書ノート」の取組と町図書館による「読書スタンプラリー」を取り入れた。この活動により、読書への意欲を喚起するとともに、子どもたちに本に接する機会を増やすことができた。



### 4 教職員の力量を高める国語科通信の発行

初任者段階の教員から、「国語では何をどう教えればよいのか。」「物語文では何を教えればよいのか。」といった質問があった。そこで、言葉による見方・考え方など、教科の指導において必要な内容を伝えることができるよう、国語専科通信を発行している。「漢字指導」「音読」「物語の見方」等を紹介することで、子どもたちだけでなく、教職員個々の授業力の向上を図った。



## III 成果と課題

- 語彙力の増加により、表現力の向上が感じられるようになった。
- 漢字の書き取りについて、時間をかけた習得が重要であることから、家庭学習との連携を強化する必要がある。